

■ 巻頭言 ■

野口英世博士ゆかりの旧細菌検査室を訪ねて

森 雅 亮

東京医科歯科大学生涯免疫難病学講座／
聖マリアンナ医科大学リウマチ・膠原病・アレルギー内科

SARS-CoV-2 ウイルスによって引き起こされる新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が全世界を席卷してから、3年が経った。その間、長かったのか短かったのか、自分でもよくわからない。しかし、ようやく感染症法上の位置づけが5類感染症に正式に移行することが決まり、それとともに名称も「コロナウイルス感染症 2019」に変更する案が検討されている（<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230217/k10013982961000.html>）。私が住む神奈川県で2020年1月15日に日本初の感染者が確認され、2月13日には日本人初の死者が出たが、すべての景色を変えたのは2月3日に横浜港に入港したダイヤモンド・プリンセス号での検疫結果からであったが、当時大黒埠頭に着岸されていた船体の姿も今はもう朧気にしか記憶にない。

今年2月のある土曜日、外勤のあとに予定外の時間が取れたので、季節外れの暖かさにも誘われて、横浜市金沢区近辺を散策していた。歩くのは気持ちがいい。この辺りに野口英世博士の細菌検査室が日本で唯一残存していることは知っていたが、これまで一度も足を運んだことはなかったので胸の高ぶりを覚えながら建物前の階段を上った。細菌検査室は当時の写真から忠実に復元されており、当時の細菌検査室やそこで使用されていた備品までが展示されていた。当時の「横浜海港検疫所」に北里柴三郎博士の伝染病研究所の研究助手だった野口博士が海港検疫医官補として赴任したのは、今から124年前の明治32年（1899年）22歳のときだったそうだ。入所して1か月で、横浜港に入港しようとしていた「亜米利加丸」2名の乗員から日本初のペスト患者を彼が発見し隔離した。この功績により北里博士の推薦を受けて、当時ペストが流行していた清国・牛莊（ニューチャン）に国際予防委員会の一員として派遣され、翌1900年には渡米しシモン・フレクスナー博士のもとで国際的な活躍を果たしたことを考えると、横浜検疫所での実績は彼の大躍進の第一歩

だったと言えるだろう。100年以上の年月を越えて、日本にとって未知のウイルスが2つも海を渡って到来した類似性に、私は不思議な想いを禁じ得なかった。

COVID-19の流行中に、頭をもたげ最近全国で増加している梅毒も、その原因がスピロヘータであること（1911年に「病原性梅毒スピロヘータの純培養に成功」、1913年に「梅毒スピロヘータを進行性麻痺・脊髄癆の患者の脳病理組織において確認し、この病気が梅毒の進行した形であることを証明」）を突き止めたのは野口博士であった。唯々、野口博士の科学への追初心、その熱意・業績の凄まじさに脱帽するのみである。

追記：

もし、横浜に学会等でいらっしゃる機会がありましたら、ぜひ訪れてみてください。
(横浜市長浜ホール：<https://www.nagahama-hall.com/saikinkensasitsu/>)。

* * *